

駅前のコーヒーショップ・チェーン店に入った朔川巫子は、顔なじみの奥様方が座ってる席に向かつて歩いていった。

「ごめんなさい、遅くなっちゃって」

実際言うほど遅くはない。予定時間より二十分ほどずれこんだだけだ。これが仕事や何かであれば怒鳴りつけるといふ問題ですむわけがない、そこはご近所づきあいのよいところ。お互い時間がなかなか自由にならないことが分かっているだけに、時間には鷹揚だ。

案の定他の奥様方も「いいからいいから」と遅刻した巫子に声をかけてくる。

その言葉に甘えて、巫子はカウンターで勝った一番安いコーヒー（一八〇円也）と一緒に一番端の席に座った。

こういう会合に興味があるわけではないが、たまには顔を出さないとご近所ネットワークから切り離される。適度に距離を開け、適度に接触を保つ。

その匙加減を忘れるとくだらないうわさ話をまき散らされる。面倒だとは思っているが、それなりに付き合っていくしかない。それに、悪い事ばかりでもない。使い方次第では面白い結果を手に入れる事もできる。

おあつらえ向きに奥様方は都合の良い話をしていた。

目下の所盛り上がっているのは韓流スター。

ブームはとつくに過ぎたと思うのだが、ピンポイントの気に入ってる者達はいららしい。芸能関係、特にお隣の半島出身者などに何一つ興味がない（嫌悪感のみ抱いている）巫子にとってはどうでも良い事であった。

今までならば。

が、今日はこの限りではない。有効かどうか分からないが、試したい事がある。

とりあえず今は、興味がある振りをして奥様方の話に耳を傾ける事にする。

――訂正。耳を傾ける「ふり」をする。

適当に相づちをうつこと三分と二秒。

向かいの席の隣に座る奥様が巫子に声をかけてきた。

「あら、朔川さんもイ・ボギンに興味ある？」

巫子が身を乗り出してゐるのに何かを刺激されたらしい。早速あらわれた効果に、とりあえず渋い顔をしてみる。

「うーん。興味というか、ちよつと気になる事があるっていうか」
言いながら少し言葉を濁し気味に喋ってみる。こういう曖昧な態度をとると、好奇心旺盛な者はひっかかってくれる。

そして好奇心のない奥様、および中高年女性はいない。

「え、なになに」

望み通り声をかけてきた奥様が身を乗り出してきた。向かいと隣に座る者も一緒に。

三人の視線を集めた巫子は、

「実は……………」

と用意していたネタを披露した。

声は小さく、しかし聞き取れるくらいに保ち。

口の側で手を立てて他に聞こえないように、というジェスチャーを付けて。

内緒話というのは、内容が大した事がなくても人に関心を抱かせずにはいられない。聞けば「なーんだ」で終わるような内容であつても、聞くまでは楽しめる。刺激に飢えた奥様方にとっては特に。

そして。

今回巫子が持ってきた話は、奥様方にとってはまたとない餌である下半身関連の内容であつた。

「……………ですって」

そういつて席に腰をおろした巫子の前で、奥様三人は目を見開いて声を立てた。

「うそー」

「本当に〜？」

「やだ〜〜〜」

女子高生のような反応を示しながら三人は目を輝かせている。この際実年齢や外見と仕草の差異などの追求はしない事にする。

大事なのは彼女たちが興味をもってくれたという事である。

「わたしも確かめたわけじゃないんだけど、そういう話を聞いたから」

「でも、ちよつとねえ」

「なんか信じられないわー」

そう言いながらも三人は「話の続きが聞きたい」というオーラを発している。

仕込んだネタは幾つかある。しかし今ここで全てを投下するわけにはいかない。

「でも、本当かどうか分からないし」

「まあそうなんだけど」

「でもねえ……」

関心を保ちながらも話を引つ張る。

間の取り方に注意をしながらネタをもう一度繰り出す。

「まあ、実際に見てみないと分からないところだし」

とやんわりと「分からないところ」を口にする。先程喋った事からそれがどの部分なのかは分かるはず。子供まで産んでる女であるならば一度以上は見たことがある部分だ。

狙い通り三人は「やあだあゝ」と声を上げた。

それに釣られて向こう側のテーブルに座ってる四人も釣られてくる。

「ねえねえ。何の話？」

チャンスである。

巫子は実にざーとらしく、「あらやだ」と言ってみせた。

「ごめんなさい、話の腰を折っちゃって」

これまた心にもない謙遜の言葉を口にする。

そんな台詞を話題に飢えた中高年が逃すわけがないと知りながら。

「気にしないでいいわよ」

「で、何を話してたの？」

その問には、巫子の隣に座ってる奥様が答えてくれた。

「で、日本はどんなの？」

興味があるのか更に踏み込んだ質問をしてくる。

これにも素直に答える。

「日本は………らしいわよ」

おおー、というどよめきが起こる。これも意外な答えだったらしい。

良い意味で。

「じゃあ、うちのは結構頑張ってるのね」

「あら、うちだって」

「まあ、………に比べたらねえ？」

そういつて最も身近な比較対象と比べていく。

どの方々もおおむね平均並み、もしくはそれ以上であるようだ。

しかし、こうして話していると分かるが、皆こういったネタが好きなようだ。露骨にならないように気をつけてはいるが、このネタをやめようとはしない。

尽きることのない話題に巫子は「してやったり」と胸の中でほくそ笑んだ。

いわゆる韓国人男性の身体的特徴は、奥様方の間で格好のネタであったようだ。

生み出されたこの流れに乗って巫子は、その他にもネタになりそうな事をふってみた。

たとえば、韓流スターの身長誤魔化し疑惑。

たとえば、韓流スターの整形手術ネタ。

そういった事を巫子は、可能な限り話題にあげた。

熱を上げていた韓流スターのそんな裏話を、奥様方は意外そうに、だが面白そうに語り合っていた。

奥様方の会合が終わり。

コーヒーショップを出た巫子はスーパーへとよっていく。今日わざわざ奥様方の集まりに出たのは、買い物のみであったか

らでもある。

予想外にうまくいった韓流スターの評価落とし。

その立役者になった男性器官の大きさについてのネタ。

顔をしかめるむきもあるだろうが、贅沢は言ってもらえない。政治・国家といった大所高所の話題など奥様方は興味ないのだ。

そんな事ばかり話してる男性諸氏や大先生は、そういう事を話す場で頑張ってもらおう事にする。

巫子はそういった「興味を持たれない話題」ではなく、「確実に食いついてくるネタ」で勝負している。

その成果は少しずつかもしれないが確実に上がってきている。

奥様連中の間では、今後確実に話題に上るだろう。

「韓流スターっていいわよね」

「でも、小さいのよね」と。

そうやって上げた熱に水をぶっかけ続ければ、必要以上にヒートアップすることもない。

下手に熱を上げてコンサートやCD、ファンクラブなどに入られたらたまらない。また、韓国ツアーに参加して大事な外貨を韓国なんぞに提供されたらかなわない。

旦那様方ががんばって稼いできた金でつくったへそくりは、確実に日本国内、もしくは日本の友好国に流してもらわねばならない。

その為には、偶像たるアイドルの評価を落とすに限る。

(ども、そういう事が分からないのよねえ……)

車のハンドルを握りながら巫子は溜息を吐く。

男はどういうわけか大所高所の話題が好きだ。それで世の中が動くと思つて。

そこが既にずれてるのだが、あえて巫子はそういうところを直そうとはおもわない。それはそれで良い。それは確かに必要なのだから。

それが及ばぬ部分は自分達で補っていけばよいのだ。

あのブログ「ねえ知ってたあ？」に書いてあったように、「私達は私達に出来ることを周知・拡散していけばいい」のだから。

それにしても。

この分野でも日本人（男性限定）はがんばってくれる。
ネタとして半島系を扱えるのも、ただただ日本人の男性機能が
優位性をもってるからである。

特に巫子の旦那は日本人の平均値を引き上げる事に貢献してい
る。

（今日は公平さんの好きなものにしてあげるか）

今夜の献立を考えながら巫子は軽やかに車を走らせていく。

蛇足ながら付け加えれば。

巫子の夫である朔川公平の好みは、塩焼きの魚や切り干し大根
の煮物と実に庶民的である。おかげで朔川家の食費はかなり安上
がりにすませる事ができる。

こういう家計簿に優しいところも公平の良い所である。少なく
とも巫子はそう評価していた。

（了）

〈参考サイト〉

ネットで探り当てたネタ元

http://www.altpenis.com/penis_news/global_penis_size_survey.shtml

ブログ「ねえ知ってたあ?」

<http://xianxian8181.blog73.fc2.com/>